

上原 良司と〈いま〉を生きる

あなたの「上原良司、平和に関する意見文・感想文」を募集します

「きけ わだつみのこえ」の歴史的背景

わだつみのこえ 70年の会 代表 西村 忠彦

この70年間、私たちの生きているこの国は、今の日本国憲法の下で、戦争というものに直接かかわることのない平和な国として歴史を重ねてきました。

しかし、それ以前の近代化を目指した凡そ80年間の日本は、外国を相手に戦争を繰り返す時代を送りました。

日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦。とりわけ、1930年代から始まった日中戦争から、1945年のアジア太平洋戦争の敗戦に至る15年間は、中国、米国・英国をはじめとする西欧列強の国々を相手に、戦いは熾烈を極め、取り返しのつかないほどの犠牲を国民は強いられました。

ここで、なぜ間違った戦争という道を、当時の日本が歩んでしまうことになったのか、若い皆さんに考えて欲しいのです。

中国大陆から東南アジア、太平洋全域に広がった戦場で、
小さな島国である日本が、強大なアメリカをはじめとする
国々と戦うなどということは、誰が考えても無謀なことでした。

しかし、強大となった軍部や国家の力に支配され、ついに昭和16年12月8日、米国ハワイの真珠湾を奇襲攻撃し、戦いの火ぶたは切られました。そして、戦争末期には、1億人の日本人が全滅するまで戦い続けるのだという、まさに泥沼の戦いを続けたのです。

国中の男たちは戦場にかり出され、戦場となったアジア全域では、3000万人余の人々が戦禍にさらされました。日本国内の都市も爆弾で破壊され、焼きつくされ、310万人以上の日本人が亡くなりました。そして、沖縄戦では兵士よりも多くの民間人が殺され、傷つき、遂には広島・長崎に原子爆弾が落とされ、ようやく日本は敗戦の日を迎えることになったのです。

この戦争の末期、当時の日本の軍部は最後の抵抗手段として“特攻作戦”という古今東西、歴史上に類を見ない、凄惨にしてはすべき戦術を敢行したのです。それは、「必中必殺（必ず、敵に命中して破壊する）」と称し、飛行機や潜水艦に大型の爆弾を積み込み、パイロット自身が敵の艦船に突っ込む（自らも珠と散る自爆）という戦法です。

戦争というものは、もとより非人間的なものであることは言うまでもありません。しかし、この人間爆弾戦法ともいうべき「特別攻撃隊」という、世界を震撼させる作戦を知った外国人は、日本国は何と野蛮な国かと、原爆投下の命令を下す引き金になっていったのです。

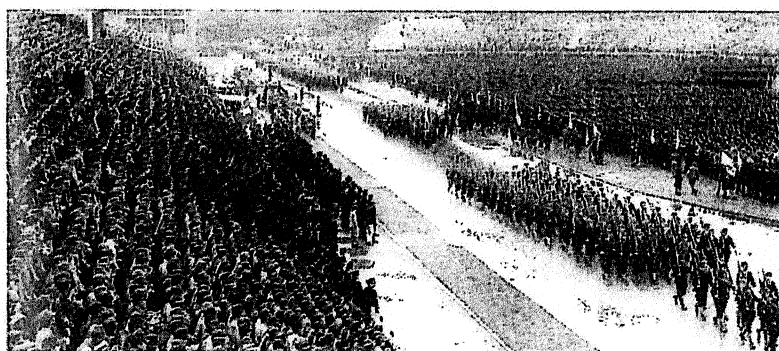
日本の軍部は、この特別攻撃隊員に若い兵士の命を注ぎこんだのです。そして、若い兵士たちが足りなくなると、国は徴兵年齢を繰り下げ、在学中の学生たちを徴兵し、短期間に操縦法を習得させて、死地に志願させました。当時の日本は、「それは、とんでもないことだ!」「お



松本中学校 卒業記念写真 17歳

かしなことだ！」と、国民が誰一人として言えない教育、そして言論統制がしかれていましたから、否応なしに戦争に参加させられ、次々に死んでいきました。

こうした南の海の果てに死んでいった若者たちの残した声を、戦後収録した本が『きけ わだつみのこえ』です。その本の冒頭に載っているのが、私たちの郷土出身の上原良司の遺書なのです。



神宮外苑の陸上競技場で行われた「出陣学徒壮行会」
(昭和18年10月21日 東京都渋谷区 国立競技場)



陸軍歩兵150聯隊に入営

いま改めてこの本を読んでもみると、国家の体面を保つため、力を持つ指導者たちの一方的な考え方で、「国民を守るため。平和のために。」という美名を掲げ、戦争を止むを得ないものとして国家の方針とした時に、その惨い戦争の犠牲となるのは、国民一人一人であり、とりわけ若者であることは自明のことです。このことを、最も私たちに語りかけてくるのが、『きけ わだつみのこえ』のような記録（ドキュメント）であり、歴史的な事実です。

みなさんに、そのことを「上原良司とくいま」を通して、戦後70年の夏に肌で感じとって欲しいと願い、ここに上原良司のことを紹介いたします。



自宅にて



昭和13年夏の上原家 右より、長男良春、次男龍男、三男良司、母よし江、長女清子、次女登志江

■上原良司に関する参考図書

『きけ わだつみのこえ—日本戦没学生の手記』 日本戦没学生記念会編集 岩波文庫
『あゝ 祖国よ 恋人よ きけわだつみのこえ 上原良司』 中島博昭編 信濃毎日新聞社
『有明山に日かげさし—上原良司の遺した想い—』 穂苅稔編(包美術館 0261-62-5078)



中国に出征中の父親に送った激励写真（昭和13年）



上原家の正月（昭和15年）

上原 良司 の略年譜

大正11年9月27日 上原寅太郎（陸軍軍医） 母〔よ志江〕の三男として、池田町中鶴に生まれる。良春、龍男、清子、登志江の賑やかな7人家族の中で育った。

昭和15年3月 松本中学を卒業。

昭和18年10月 慶應大学経済学部在学中、学徒出陣。

昭和19年2月 陸軍特別操縦見習士官試験に任命〔同期1200名〕

昭和19年7月まで 熊谷、相模原、館林陸軍飛行学校で、基礎訓練を積む。

昭和19年7月下旬 鹿児島県知覧基地に向かう途次、有明に帰省。両親・家族に宛てた「第2の遺書」を記し、『クロオチェ』（冷子への想いを記したもの）とともに自宅に残す。

昭和19年8月から昭和20年4月 知覧基地や目達原基地にて実践飛行訓練を積む。

昭和20年4月始め 目達原基地にて特攻要請を受け、水戸のへ途次、有明に帰郷。

昭和20年4月14日 水戸の常陸教導飛行師団にて、第56振武隊結成。

昭和20年5月3日 第56振武隊は調布飛行場を出発し、知覧基地に移動。

昭和20年5月10日 陸軍報道班員の高木俊朗氏に依頼され、「所感」を記し託す。

昭和20年5月11日 第1攻撃隊を編成し、6時15分に知覧飛行場を出撃。

午前9時 沖縄島西北海上にいる敵艦船に突入、戦死。享年22歳。

昭和20年8月 高木俊朗が、遺族に「所感」と写真を届ける。

【参考】上原家の三兄弟 いずれも戦死（戦病死）

☆龍男（次男）慶應大学医学部出身、海軍軍医
昭和18年10月22日 潜水艦搭乗中、オーストラリア沖のニューヘブリズ諸島にて、米駆逐艦隊と交戦、戦死。26歳

☆良司（三男）慶應大学経済学部
昭和20年5月11日、沖縄戦特攻攻撃に参加
戦死。22歳

☆良春（長男）慶應大学医学部出身、陸軍軍医
昭和20年9月24日、ビルマのトンゲー野戦病院にて戦病死。31歳



戦後、父は戦争で亡くなった3人の肖像を、彫刻家 上條俊介に依頼、作製

上原 良司 の遺書 遺稿

[理解をしやすくするため、現代仮名遣いに改めてあります]

1、「遺書」 [第1の遺書]

「遺書」

父上様並びに母上様。

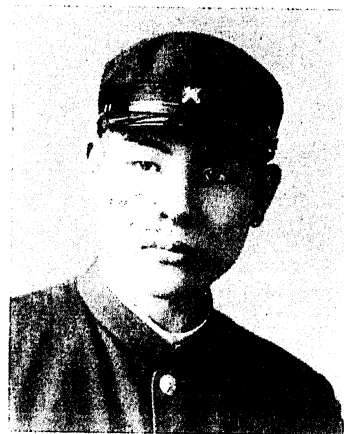
長い間御苦勞をおかけして、その御恩に報いることができません、去る私をお許し下さい。しかし直接国家に尽くすことが、間接に御両親様の御恩に報いることと確信いたしております。私は喜んで去っていきます。私が戦死したと聞かれても、決して歉かないで下さい。私は戦死しても満足です。何故ならば、私は日本の自由のために戦ったのですから。

自然の原理として、人間は必ず死すべきものです。戦死こそ私の最も願わしい死です。決して歉かないで下さい。

それではお元気で。くれぐれも御身御大切に。

昭和18年9月22日 夜、9時

良司



慶應大学入学時 18歳

【解説】 第一の遺書は、「徴兵猶予停止」が発表された、昭和18年9月22日の夜、下宿をしていた東京の青木家で書き残した。徴兵されれば、戦死も覚悟した良司は、ファシズムを批判した愛読書『クロオチェ』（羽仁五郎著 河出書房）の裏扉面に第1の「遺書」を書き記している。

2、「遺書」 [第2の遺書]

「遺書」

生を享（う）けてより二十数年何一つ不自由なく育てられた私は幸福でした。温かき御両親の愛の下、良き兄妹の勉勵により、私は楽しい日を送る事が出来ました。そして、ややもすれば我ままになりつつあった事もありました。この間御両親様に心配をお掛けした事は、兄妹中で私が一番でした。それが何の御恩返しもせぬ中に先立つ事は心苦しくてなりません、忠孝一本、忠を尽くす事が、孝行する事であるという日本においては、私の行動を御許し下さる事と思います。

空中勤務者としての私は、毎日毎日が死を前提としての生活を送りました。一字一言が毎日の遺書であり遺言であったのです。高空においては、死は決して恐怖の的ではないのです。このまま突っ込んで果して死ぬのだろうか。否、どうしても死ぬとは思えません。そして、何かく突っ込んでみたい衝動にかられた事もありました。私は決して死を恐れてはいません。むしろ嬉しく感じます。

何故ならば、懐かしい龍兄さんに会えると信ずるからです。天国における再会こそ私の最も望ましい事です。私はいわゆる、死生観は持っていませんでした。何となれば死生観そのものが、あくまで死を意義づけ、価値づけようとする事であり、不明確な死を怖れるの余り、なす事だと考えたからです。私は死を通じて天国における再会を信じているが故に、死を怖れないのです。死をば、天国に上る過程なりと考える時、何ともありません。

私は明確に云えば自由主義に憧れていました。日本が真に永久に続くためには自由主義が必要であると思ったからです。これは馬鹿な事に聞えるかもしれませんが。それは現在日本が全体主義的な気分に包まれているからです。



目達原基地で訓練のころの良司
(昭和19年12月)

しかし、真に大きな眼を開き、人間の本性を考えた時、自由主義こそ合理的なる主義だと思います。戦争において勝敗を得んとすれば、その国の主義を見れば事前において判明すると思います。人間の本性に合った自然な主義を持った国の勝戦は、火を見るより明らかであると思います。日本を昔日の大英帝国のごとくせんとする、私の理想は空しく敗れました。この上は、ただ日本の自由、独立のため、喜んで命を捧げます。

人間にとっては一国の興亡は実に重大なことであります。宇宙全体から考えた時は実に些細な事です。驕れる者久しからずの例えどおり、もし、この戦に米英が勝ったとしても、彼等は必ず敗れる日が来る事を知るでしょう。もし敗れないとしても、幾年後かには、地球の破裂により粉となるのだと思うと、痛快です。しかのみならず、現在生きて良い気になっている彼等も、必ず死が来るのです。ただ、早い晩(おそ)いかの差です。離れにある私の本箱の右の引出しに遺本があります。開かなかつたら左の引出しを開けて釘を抜いて出して下さい。

では、くれぐれも御自愛のほど祈ります。大きい兄さん清子始め皆さんに宜しく。

では、さようなら。御機嫌良く、さらば永遠に。

良司より

御両親様へ

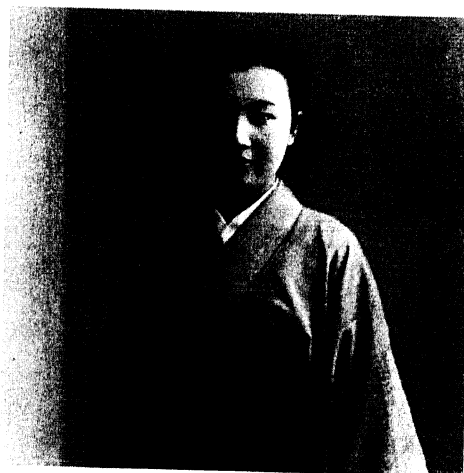
〔解説〕 昭和19年7月末、館林から知覧に転属になった際、帰郷し自宅で書き残したものである。この第2の「遺書」と遺本『クロオチェ』は、良司が戦死した後、家族の手によって自室から発見された。新版の『さけ わだつみのこえ』には、冒頭に「所感」が、この第2の「遺書」と「日記」が、あわせて掲載されている。

3、「クロオチェ」に遺した冷子への想い

〔解説〕 昭和18年秋以降 冷子の婚約後記したもの。良司は、愛読書である羽仁五郎著『クロオチェ』の、本文のところどころの文字に、赤ペンで○印を付け、忘れることのできない冷子への想いを遺した。

その赤丸の文字を最初から拾いながら読み進めていくと、秘かに心を寄せていた「冷子への愛の言葉」が完成する。次に、全文を分りやすく記してみよう。

冷子ちゃん、さようなら。僕は君が好きだった。
しかし、その時すでに君は婚約の人であった。
私は苦しんだ。そして、君の幸福を考えた時、
愛の言葉をささやくことを断念した。
しかし、私はいつも君を愛している。



石川冷子（きょうこ）女学校の卒業写真

4、「所感」 [第3の遺書]

昭和20年5月10日 知覧基地にて、出撃の前夜書き遺したもの

五十六振武隊 陸軍少尉 上原良司

大正11年9月27日生

本籍 長野県東筑摩郡和田村173 現住所 長野県南安曇郡有明村186

出身校 慶応義塾大学経済学部

「所感」

栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊ともいふべき陸軍特攻隊に選ばれ、身の光栄これに過るものなきと痛感致しております。

思えば長き学生時代を通じて得た、信念とも申すべき理論万能の道理から考えた場合、これはあるいは、自由主義者といわれるかも知れませんが、自由の勝利は明白な事だと思います。人間の本性たる自由を滅す事は絶対に出来なく、例えそれが抑えられているごとく見えても、底においては常に闘いつつ最後には必ず勝つという事は、彼のイタリアのクローチェも云っているごとく、真理であると思います。権力主義、全体主義の国家は一時的に隆盛であろうとも、必ずや最後には敗れる事は明白な事実です。



第 56 振武隊となりて
調布飛行場で「飛燕」と訓練を積む良司

我々はその真理を、今次世界大戦の枢軸国家において見る事が出来ると思います。ファシズムのイタリアはいかん、ナチズムのドイツまた、既に敗れ、今や権力主義国家は、土台石の壊れた建築物のごとく、次から次へと滅亡しつつあります。真理の普遍さは今、現実によって証明されつつ、過去において歴史が示したごとく、未来永久に自由の偉大さを証明して行くと思われまふ。自己の信念の正しかった事、この事あるいは祖国にとって恐るべき事であるかも知れませんが、吾人にとっては嬉しい限りです。現在のいかなる闘争も、その根底を為すものは必ず思想なりと思う次第です。既に思想によって、その闘争の結果を明白に見る事が出来ると思ひます。

愛する祖国日本をして、かつての大英帝国のごとき大帝国家たらしめんとする私の野望は遂に空しくなりました。真に日本を愛する者をして、立たしめたなら日本は現在のごとき状態にあるいは、追い込まれなかったと思います。世界どこにおいても肩で風を切って歩く日本人、これが私の夢見た理想でした。

空の特攻隊のパイロットは一器械に過ぎぬと一友人がいった事は確かです。操縦桿を採る器械、人格もなく感情もなくもちろん理性もなく、ただ敵の航空母艦に向って吸いつく磁石の中の鉄の一分子に過ぎぬのです。理性をもって考えたなら実に考えられぬ事で、強いて考えうれば彼らがいうごとく自殺者とでもいいましようか。精神の国、日本においてのみ見られる事だと思います。一器械である吾人は何も云う権利はありませんが、ただ、願わくば愛する日本を偉大ならしめられん事を、国民の方々をお願いするのみです。

こんな精神状態で征ったならもちろん、死んでも何にもならないかも知れません。故に最初に述べたごとく、特別攻撃隊に選ばれた事を光榮に思っている次第です。

飛行機に乗れば器械に過ぎぬのですけれど、一旦下りればやはり人間ですから、そこには感情もあり熱情も動きます。愛する恋人に死なれた時、自分も一緒に精神的には死んでおりました。天国に待ちある人、天国において彼女と会えると思うと、死は天国に行く途中でしかありませんから何でもありません。

明日は出撃です。過激にわたり、もちろん発表すべき事ではありませんでしたが、偽らぬ心境は以上述べたごとくです。何も系統立てず、思ったままを雑然と並べた事を許して下さい。明日は自由主義者が一人この世から去って行きます。彼の後姿は淋しいですが、心中満足で一杯です。

言いたい事を言いたいだけ言いました。無礼を御許し下さい。ではこの辺で。

出撃の前夜記す。

〔解説〕 昭和 20 年 5 月 10 日、明朝の出撃が決まった夜、高木俊朗報道班員は三角兵舎にいる良司に目を止め、「今の気持ちを書いて下さい」と語りかけ、責任を持って故郷に届けることを約束した。

便箋 7 枚にわたるこの良司の遺書は、軍部の厳しい検閲の目をくぐり抜け、戦死後の昭和 20 年 8 月、高木俊朗氏本人の手で、両親と妹たちの待つ有明に直接届けられた。

こうした遺書を書き遺し、戦地に赴かなければならなかった若者の思いを、いま正しく理解するには、十分な歴史的背景や思想、当時の世界情勢を理解しなくてはなりませんが、平和で幸せな未来の日本を願って散った若者の言葉を汲み取り、思いを巡らして欲しいと願っています。